

【大好きな副団長が結婚するらしいので騎士団を辞めましたが……何故か狼狽しまくった副団長が追いかけて来て、わからせラブラブ♡えっちからの溺愛求婚されました】



宰相の長いお小言を聞いていたらすっかり遅くなってしまった。

誰もいない執務室に戻り、窓を開け放つと心地良い風が頬を撫でた。

暗闇には慣れているので灯りをつけなくても荷造りに支障は無いけれど、

少しでもこの火照った頬と早まる心臓を落ち着けたかったから、春先の少し

だけひんやりとした風は有り難かった。

それにしてもびっくりした。なんだったんだろうさっきの……。

私は宰相殿のお小言の間中も騒がしかった心臓を無理矢理鎮めるように、軍服の上からぐっと胸を押さえつけた。ただでさえサラシで窮屈な胸が更に苦しくなるが、物理的な痛みによって少しだけ鼓動の痛みは軽減した気がした。ほんの気休めにしかない事には無視をする。

ジムが既に帰宅している事にホッとした。

夜明けまで時間はあるものの、早く出発するに越したことは無いので、手早く荷造りを始める。その間も頭の中を支配するのは先ほどのアレ。

『俺も、貴女の事を信頼しています。貴女だけを、心から』

戦場での斬りつけられるような視線とも、貴族として振る舞う時の温和ながらも隙の無い表情とも違う、初めて見るジムの顔。熱くて、苦しくて、まるで助けを求めているみたいだった。

ジムが私に助けを求める？

いや、いやいやまさか。ジムが私にそんな事を求めるはずが無い。よしんばあったとしても、提出が遅れている書類を急かすだとか、たまには有給を取らないと体を壊すだとか、そういうものだろう。

助けを求めるといふより、保護者の苦言のようだけれど、ジムという男は

そういうイメージが真っ先に出るほど、世話焼きな男なのだ。まあ、ジムが口を挟まずにはいられないほど、私が世話がかかる上司だったという可能性は大いにあるだろうけれど。とにかく私が助けを求めるより先に世話を焼いてくれるような人、助けを求めるよりも求められる男。

それが、ジム・フォン・ゲリュシオン——ゲリュシオン公爵嫡男だ。

蜂蜜色の瞳に、黒曜石の髪。均整の取れた体から繰り出される一太刀は魔獣核をいとも容易く貫く。柔和な笑みと柔らかな物腰で、貴族令嬢のみならず城下町の女性の熱視線を一身に浴びるような男。そんな人が私の部下におさまっているとは、我ながら申し訳なくなってくる。

——そう、本当に、心から申し訳ないのだ。

私は、ルード国家騎士団である黒鷲団の団長だ。

団長という役職ではあるものの、黒鷲団は主に平民徴用の者で構成されており、私も例に漏れず平民である。

しかも流浪の。定住地を持たない旅の者だった。

五年前。剣の修行がてら旅をしていた私は、たまたま森で山賊に襲われている貴族の御一行を助けた。その貴族というのがこのルード国のイーベル伯爵という方で、伯爵は国の軍事の一端を任されているお方だった。

私の強さにいたく感激してくださった伯爵は、騎士団への加入を熱望してくれた。路銀にも困っていたところだったし、騎士団なら魔獣相手に野戦ばかり繰り返していた私の剣の型をまた新しい方向に押し進めてくれるかもしれ

れないと思い、入団を決意したのだ。

慣れない軍服。集団行動。貴族からの侮蔑の目。平民の同僚からの下卑た視線。不慣れな事ばかりで何度心折れそうになったか分からない。

旅していた時の気樂さが恋しくなっていた折、ジムが入団してきた。

私の方が三ヶ月ほど先輩だったためか、騎士団のルールなどを教えたりするよう団長から仰せつかった。その頃の私はイーベル伯爵以外の貴族にすでに苦手意識を持っていたし、男からの視線にも辟易していた為、かなり、物凄く嫌だったが当然そんな事言える訳もない。

しかし当初思っていた危惧は全てのを外れる事になる。ジムは終始丁寧な態度を崩す事なく、私に接してくれた。平民である私が教える事に素直に頷

いてくれ、また私が王宮関連の作法に四苦八苦していても馬鹿にする事なく優しく教えてくれた。話しやすく聞きやすいその態度は、なるほどご令嬢方に人気の貴公子というのも頷けると感心したものだ。どの立場から言ってるんだと自分自身に呆れてしまうが、慣れない環境に慣れない先輩役に焦っていた私にとって、ジムの在り方は本当に助かった。

ジムは剣習いのために騎士団に入ったという。自分で言うのもなんだけれど、入団直後に手加減の仕方がまだ分からず、先輩数十人を叩きのめしてしまった私から見ても、ジムの剣の腕は入団直後から既に実戦で通用するレベルだった。

ゲリュシオンの嫡男は伝統的に騎士団に加入することが義務付けられてい

るらしい。

けれどそれなら貴族子息が多く加入している赤獅子団や青鮫団に入団となりそうなものだが、まあ貴族の中にも色々あるのだろう。貴族の伝統やらなんやらで疑問を持ち始めたらキリが無いということも私はよくよく痛感していた。

そして騎士団入団から二年後。すなわち今から三年前。

団長ヒューリーが異動、副団長ジースが退団となった折、ヒューリーが私を団長に任命し、副団長にジムを任命した。

待ってください。いやそこは。逆にしておけば良くないですか？

入団してしばらくの間であれば、貴族とはいえ他の者の手前、特別待遇をしたら士気に関わるから平等に扱うでしょう。実際そうでしたね、平民である私を直属の先輩役にしましたもんね。私だって同じ立場であればそうすると思います。

でももう入団して二年経過したんですよ？団長はジムでしょう？

剣の腕前は一級、事務処理も早く、部下からの信頼も厚い。「それは貴女もでしょう？事務処理は少しゆっくり目ですが」などとジムが隣で笑っていたが、あえて無視した。

確かにここ一年ほどで騎士団内での私の評価はかなり変わった。先輩も同輩も私の剣の腕を認めてくれ、同じ目線で会話している。後輩は非常に慕っ

てくれており尊敬の目さえ向けている。頑張ってきて良かったな、と今日までの自分の働きに充実感を覚えてきているのは確かだけれど。

団長になる、というのは話が変わってくる！

いや正確にいうと私が団長になる事自体が問題なのでは無く、ジムを差し置いて私が団長になるのが問題なのだ。「ここは黒鷲団ですよ、貴族平民関係ありません」とジムは言う。いやそうかもしれないけど、一応やっぱり気持ちの問題としてあるでしょう。貴方だって他の貴族から色々言われているの知っているんだからというのは流石に明言を避けつつ、そうだ他の騎士団に移動とかさせてあげた方が良いんじゃないですか？それこそ赤獅子団とかに、と口にしたら、私を団長に指名してきた前団長ヒューリーが大笑いした。

ヒューリーが口を開く前に「貴女が団長に指名されなきゃ執務室で暴れますよ」とジムは笑って言った。

な、なんで？ 団長やりたくないんですか？ いやそんな訳ない、この二年、ジムは小隊長、師団長と頑張って昇進してきたのだ。最終目標は団長に決まっている。

私は困惑しながらも、ジムとヒューリーの押しに負け、団長を拝命することになった。

「嬉しいです。これからはもつと貴女の側にいられる」

そういう事を笑って言わないでほしい。胸が苦しくなるから。

好きが溢れてしまうから。隠せなくなってしまうから。

入団して二年の間に私はすっかりジムの事が好きになってしまったのだ。

そしてそれから三年の月日が経った。

団長と副団長という間柄で私たちは上手くやって来たと思う。

魔獣退治で多くの功績を挙げ、防衛戦で軍功を頂戴し、団員の練度の底上げを行った。

—— 本当に楽しかった三年間。

「団長になっても貴女は前線に出たがる癖が抜けませんね」

夜の帳が落ち、ランプの灯りが城内を照らし出す時分。黒鷲団執務室にて

今日も報告書に苦勞している私に、ジムはため息まじりに言つて来た。

「出たがるなんて言い方は人聞き悪いですね。適材適所と言うんですよ」

「貴女の劍の腕のみを言うならこれ以上無い適材適所ではありますが……、団長という立場を鑑みるとどうなのでしょうね？」

「だから今その言い訳の報告書を書いてるんです。ジム、何か上手い言い訳ありませんかね？」

「もうそろそろネタ切れですよ」

「そうなんですよね……」

「報告書自体は適当にでっち上げれば良いと思いますけど」

「えへ。私もそう思います。そうしますね」

ジムから免罪符を貰えたばかりに、私は新しい言い訳のネタを考えるのは諦めて、もう何度目かも分からない使い古した理由を報告書に書いていく。「……前線に出ようとなさるのは、貴女の剣士としての血がそうさせるのでしょうか？」

「え？そんな高尚なものじゃありませんよ。そもそも自分を剣士と名乗るのすら烏滸がましいのですから」

「？何故です、貴女の実力は最早誰もが知るところです。本来であればもっと多くの武勲を貰っていてもおかしくない。あの宰相が邪魔立てさえしなければ」

二人きりの執務室にバキリ、という渴いた音が響く。ジムが手にしていた

木製のボードにヒビが入っているのが見えた。

「あら。ジム怪我はしていませんか？」

私は思わず立ち上がって書類棚の前にいたジムの元へ駆け寄った。黒鷲団の歴史は古い。その分備品も古く壊れかけの物も少なくない。平民出身で構成されている黒鷲団は他の騎士団に比べ予算が少ないのだ。このボードも寿命だったのだろう。

「失礼しました。自分の不注意ですのでこちらのボードに関しては給与天引きしておきます」

「え？ いいですよ、そんな。ウチの騎士団で物が壊れるなんて茶飯事ではありませんか。それより怪我は？」

「……怪我はしていません。怪我というなら貴女の方でしょう」

困った様に微笑むジムの蜂蜜色の瞳の中には、額に包帯を巻いて頬にガゼを貼った女がいた。本日の魔獣討伐作戦において前線に出た隊長の私である。

「え？ああ、大した事ありませんよ」

「貴女は大した事ないと仰いますが、俺はそう思いたく無いんですよ」

「？でもそれを織り込んでの作戦で……ジムも賛成してくれたではありませんか」

「貴女の必死の説得に折れてあげたと言ってください。諸手を挙げての賛成では決してありません」

眉間に皺を寄せて肺の底から漏れ出た様な溜息を吐くジムの様子が可笑しくて、つい声を上げて笑ってしまった。それがお気に召さなかったらしい。研ぎ澄まされた真剣のようにスウツ……と目を細める彼の眼光は美しくも鋭かった。

「あ。そ、それはどうも、ごめんなさい……？」

「……構いませんよ、貴女のその手の謝罪は入団してからこっち天文学的な数ほど聞きましたし、そんな貴女のサポートをするのも俺の仕事ですから。今回は……不覚ながら怪我をさせてしまいました。本当に申し訳なく思っています」

「？この怪我は私の責任なんですから、ジムが気に病む必要は無いですよ」

「何度も言いますがね、団長。俺はいつだって貴女が十全に動けるようにしておきたいんです。貴女の憂いを全て取り除きたい。怪我をさせてしまつたら意味がありません」

「そ、それはどうも。恐縮です……」

ジムは一步前に出て、真上から私を見下ろす様に詰め寄る。私よりも二十センチは高い身長でそんな事をされると威圧感が凄い。しかし相変わらず本当に律儀というか誠実というか、責任感のある人だなと思う。私は自分で味方の道を切り拓きながら、その場の状況を見て指示を出すというやり方が性に合っていた。その為、自分を前線に置く作戦を提案しがちで、ジムは毎回嫌そうな顔をしながらも頷いてくれるのだが、私が怪我をするとこれまた毎

回こういう事を言ってくれるのだ。申し訳ないな、と思いつつも毎回やる私も私だし、それを許してくれるジムもジムだけれど、私にはそれが心底嬉しかった。

「……団長は、何故剣士と名乗るのが烏澹がましいと思うのです？」

「え？あ、ああ。大したことではありませんよ。烏澹がましいと思うことすら傲慢な考えですし。単純な話、私は気まぐれ屋なのです」

「そう、ですか？そのように感じたことはありませんが……」

「思い切りの良い気まぐれ屋です。例えば、剣の修行の旅に出ようと村を出た時。イーベル伯爵にお話を頂いてこの国に留まろうと決めた時。そうしようと思ったら一直線になってしまうのです。気まぐれに、思い切り良く」

「ああ。そう言われたら確かにそうですね。一般的にイメージする気まぐれ屋とはまたちよつと違う……貴女の太刀筋のようなにまっすぐな」

「ふふ。良い様に言ってくれますね。ヒューリーには猪のようだと言われましてよ」

くつくつ笑っていると、ジムの口元が妙な弧を描く。下に向いているのか上に向いているのか判断が難しい、感情を殺している時の表情だ。この五年間でジムの表情の機微に気付けるようになったのは喜ばしい反面、こうして感情を殺しているんだなというのわかるようになってしまったため、「あ、今何か隠したな」というのが分かってしまう。それが怖くてちよつぴり悲しかった。悲しむ権利なんて私には無いのに。

「猪、というのは比喩としても……まあ言いたい事は分かりますよ。それでその在り方が貴女の思う剣士像に当てはまらないという事でしようか？」

「ええ。そうです。それに剣士というのは強さだけでは駄目なのです。もつとこう、なにか一本芯が通ってないと」

「芯、とは？」

「分かりません。なにしろ私も修行中の身ですので。探している最中です」

「そう、ですか」

そういえばジムとはそれなりの付き合いだが、こういう話をするのは初めてだなと思い、ふと興味が湧いた。ジムが騎士団に入っただけは剣習いのためという事だった。ジムはいずれ公爵となる身だ。上に立って人を動かす事が

義務付けられている。そんな人物が五年間騎士団に身を置いて出た考えを知りたいと思った。

「ジムは？」

「え？」

「ジムの考える騎士像とはどんなものかと思ひまして。もしあればひ参考
に伺いたいです」

「俺の考える騎士像ですか……」

顎に手を当てて考え込む仕草がこんなに絵になる人間は見た事がない。瞳
を縁取るまつ毛が、蜂蜜色に物憂げな影を落とす。

「月並みですが、護りたい人を護れる人ですかね」

「まあ。素敵じゃないですか」

素直で素敵で、直球な解答だ。月並みだなんて言い方でお茶を濁すなんてもつたない、騎士道かくあるべしの答えど真ん中だ。

「あ。でも内緒にしておかないと国中のご令嬢方が列をなしていらつしやいますよ。貴女に護られたいと目を輝かせて」

「それは、困りますね」

心底困ったように眉尻を下げて微笑むジムに合わせて、私も微笑んだ。

上手く笑えている事を祈りながら。

「……団長は？」

「はい？」

「団長は困りますか？」

「え？何がですか？あ、ご令嬢が列を成す事ですか？まあ、困ると言えば困りますかね。列整理に団員たちを駆り出すのも気の毒ですし……」

黒鷲団執務室から伸びる長蛇の列を整理する私と団員たちの風景を想像している、ジムが更に一歩近付いて来て身体ごと使って私を押して来た。

「え？え？」

困惑しながらも、その押される力に逆らわずにしていると壁に追い詰められた。ジムの両手が顔の横に来て完全に囲い込まれた状態になる。

なんだろう、なにか気に障ることを言ってしまったのだろうか。

「……押し返さないんですね」

「?え?ええ」

「何故ですか?」

「え、な、なんででしょう、驚いてるから?」

「貴女はどんな状況でも反射で対応出来るでしょう。腕力で押し込んでいる訳ではないから逃げ出せるはずです」

「え?はあ。そ、そうですねえ?確かに剣での試合ならまだしも腕力では敵いませんので……」

「では何故押し返しも逃げもしないんです」

「え。だってジムですし」

「は」

珍しいジムがポカンと口を開けている。そのちよつと間抜けな顔が面白くて可愛くて私は「最後」に良いものが見れたな、と心の中ではしゃいでしまふ。

「……ジムですし、とはどういう意味ですか」

これまた珍しい、普段のジムの声より低い声に内心ときめいてしまう。理由は分からないけれど、彼が機嫌を損ねているかもしれないのに我ながら悠長な事だ。でも仕方が無い。好きな人の色んな表情を見たいというのはありふれた願いであるはずだから。

「……ええと。信頼してますから。副団長として」

そして私は模範解答を答えた自分に脳内で盛大な拍手を送った。素晴らし

い、自他共に認める嘘が下手な私も、人生の大一番にはこのように振る舞える。

恋とは人の嘘つき能力を一段も二段も底上げしてくれるのだ。

まあ副団長として信頼しているのは事実なので、真実が嘘の手助けをしてくれたといったところか。だって信頼だけじゃないから。ジムになら何をされたっていいから。だからジムがどういう思惑でこんなに近付いて来ているかは不明だけれど、好きにさせているというだけの話。

言えるわけが無い、こんな事は。

「信頼……」

「ええ、もちろん」

屈んだジムの黒髪が私の髪と混じるくらい、彼の顔が近づいて来た。何をされたつていいとは思っているけれど、先ほどからずっとんでもなく緊張しているし、困惑しているのだから、加減はして欲しい。心音が聞こえてやしないかと気が気ではない。

「俺も、貴女の事を信頼しています。貴女だけを、心から」

「へ？あ、ああ、それは光栄ですね。ありがとうございます」

事務処理が苦手で足を引っ張っているし、私が団長なばかりに他貴族から色々言われていて、腹に抱えている事もたくさんあるだろうに、そんな事を言ってくれるなんて。

——最後に良い思い出が出来てしまった。嬉しい。

混乱する頭に真っ先に浮かんだのは純粹な喜び。

なんでジムが私にそんな事を言ってくれるんだろうという疑問と喜びで、私の心はぐちゃぐちゃだった。

ジムは尚も何かを言おうとしていたけれど、執務室の扉がノックされて私は慌ててジムから距離を取った。そして宰相が呼びです、という書記官の言葉に従い「長くなりそうだから、今日は先にあがってください」と笑いなからジムに告げて逃げるように執務室を後にした。

真っ赤な顔を見られないよう俯きながらだったので、最後ジムがどんな顔

をしていたのか見られなかった事だけは心残りだけど。



ジムの事が好きだ、と自覚した時にはもう手遅れだった。

宰相の嫌味に疲れた私に「とっておきです」と言って美味しい紅茶を用意してくれるところ。報告書が終わらなくて先に帰っていいって言ってるのに「俺と一緒にやったほうが誤字が少ないでしょう」なんて軽口と一緒に残業してくれるところ。女だからと私の剣の腕をみくびらないところ。「団長の剣技って綺麗ですよ、俺懂れますよ」って言ってくれたところ。好きなと

ころをあげればキリが無い。

そんなジムに王女殿下との婚約話が出てきたのは今から四ヶ月前。

風の噂に聞いた私は、悲しむでも動揺するでもなく、まあそうだろうなと思つた。いや悲しいは悲しかった。その晩は泣いて眠れなくて、翌日が休暇だったことに心底安心したものだ。

でもこの恋が叶う事は無いと分かっていたし、ジムの立場上、そういう話が出てくるのは当然どころか遅いくらいだ。

———それに何より。私は彼と出逢つて五年間。ジムにずっと申し訳無さを抱えていた。

ジムは優しいから言わないけれど。ジムは時折、私を見てひどく苦しそうな顔をするのだ。あのいつも温和で、貴族相手の腹芸に長けたジムが隠すのも困難なほどの感情だ。それがどんな感情かはおして知るべしだろう。なにせ私はジムに迷惑をかけ過ぎている。彼の貴族としてのキャリアを邪魔し過ぎている。

嘘を隠すのが上手い男が、隠し切ることが出来ない程の苦しみ。

私はジムの事を信頼しながらも、同時にいつ見放されたっておかしく無いと思っていた。

だから私はジムと王女殿下の婚約話の噂を耳にした時、あつという間に決断できたのだ。

騎士団をやめよう。

本来の流れであれば、辞める一ヶ月前には騎士団全体に通達するし、引き継ぎ業務だつてある。しかし、私は辞めることをジムに告げる時に泣いてしまいそうなのが怖かった。迷惑をかけ続けた上、目の前で訳の分からない理由で泣き始める私、想像するだに最悪過ぎる。

私はかつて騎士団への入団を手配してくれたイーベル伯爵に頼み、内密に特例を認めて頂き、辞めると決めてからの四ヶ月間、静かに確実に準備を進めていった。

幸い、書類仕事に関してはジムが全て把握しているし、実務に関しても同様だ。宰相以下貴族は私の事を嫌っているし、引き継ぎ及び業務自体に支障

が起きる事は無い。

つまり現状、私のこの秘密の退団を知っているのはイーベル伯爵と、伯爵が信頼する書記官殿のみなのだ。

騎士団全体に通達を送らないこと、部下に別れと労いの言葉無く去ること、ジムに一言も礼も無く消えること。しかもその理由が、好きな男の前でなんだか泣きそうな気がするからというのだから、もう本当に申し訳なく思う。

許して欲しいと思うことすら出来ない。自分自身情けなくて自分が許せないからだ。

けれどそんな私にもイーベル伯爵は温情を下さった。伯爵は今までの私の働きを黒鷲団に還元すると言って下さったのだ。

黒鷲の武具や備品の新調、待遇の向上。身に余る僥倖だが、部下達の境遇が改善するのだからと、厚かましくも有り難くお願いした。

伯爵は根無草だった私に五年間の定住の地と、やり甲斐ある仕事を与えてくださった。そして素敵な出逢いも。イーベル伯爵には感謝してもし足りない。感謝を述べる私に伯爵は「むしろ対応が遅かったくらいだ。宰相たちの態度、すまなかったね。君の騎士団への貢献を考えたら足りないくらいだし、よくこの五年間やり遂げてくれた」と仰ってくださいました。本当に得難く素晴らしい方と出逢えた事に、私はこの国に来て本当に良かったと思った。

そして女が団長だという理由で、黒鷲団員がナメられ続けてきた状況も終わる。ジムに対して平民女の下で副団長をやっている気分は如何ですか、な

んて言ってくる貴族もいなくなる。

なんて素晴らしいんだ。こんな事ならもつと早く辞めれば良かったとすら思えてくる。

晴れやかなため息を吐きながら、私は執務机の引き出しを閉じた。

この中にはこの四ヶ月間コツコツと作り上げてきた、引き継ぎ書と任命状が入っている。もう必要の無い引き出しの鍵は机の上に置いた。掃除をして、私物をリュックに入れて、軍服から着替えた。

綺麗に整えられ、自分の痕跡を完全に消した執務室を見回して、小さな満足感を得る。

これで安心して去る事が出来る。

お世話になりました、と誰もいない執務室に向かって頭を下げた。

さて、掃除に思いの外時間を取られてしまった。まもなく夜明けの時間になつてしまう。私は早足で執務室を出て、南にあるヨーリア港へと急いだ。



頭が真つ白になるとはこういう事か、とどこか他人事のように思った。

「怪我などはしていないようで安心しましたよ。ああいえ、団長の腕ならそこらの山賊が束になつてかかつてきても問題は無いでしょうが、寝込みを襲

われるなんてこともありますからね。特にこんなセキュリティの甘い宿屋なんかでは」

柔らかな笑みに、穏やかな話し方。なのに背筋に冷たい汗が流れるのは、ジムの目が全く笑っていないからだろう。黄金色の蜂蜜を過熱した時、どろりとしたカラメル色になるように、底無しに昏い視線が私を射抜く。

「ああ、それともまさかとは思いますが、とつくに寝込みを襲われているんでしょうか？だとしたらそいつらを軒並みぶち殺さないといけないので、人相を教えていただけますか？」

にこりと微笑むジム。でもやはり瞳が笑っていない。むしろ圧が強くなるばかりだ。

私は毒魔獣三匹に囲まれた時ですら震えなかった足が、ガタガタ震え出した事にすら気づけないほど放心していた。

黒鷲団を去って一ヶ月。私はヨーリア港を出て、南へ南へと旅をした。特に旅の目的は無かったけれど、とにかく今はルード国を離れようと思ったのだ。ある程度離れることが出来たら、また魔獣狩りでもしながら剣の修行に出るのも良いし、どこか落ち着けるところに居を構えるのも良い。騎士団に勤めていたお陰で幸い路銀はたっぷりある。国から離れつつ今後の事はゆっくり考えようと思っていた。

ルード国の南端、フォーリアに着いたのは昨日のことだ。フォーリアを一

時間ほど歩いた先はもう隣国ルリアナだ。国をまたぐ前にこの町で食料の補給をして、身体を休ませようと思って宿を取った。

一夜明けて、朝から朝市で良い買い物が出来たとウキウキで宿屋に帰ってきたところで、ジムに話しかけられた。

そう、ジムがいたのだ。ここにいるはずの無いジムが。

混乱する私の腕を掴んで、私が宿泊している部屋に入り込んで来た。

今、私はジムの大きな右手で両手を壁に押し付けられている。

突然のジムの来訪と彼から発されるとんでもない圧に、私はひどく困惑していた。そのためジムの質問に反応することが出来無い。

「団長？聞いていますか？寝込みを襲われたことがあるのか、人相は覚えて

いるか、聞いているんですよ俺は」

「へ？あ、ね、寝込み？」

幸いな事にそんな事は起きていない。そもそも騎士団長として、気配があればすぐに起きて臨戦体制を取れる癖は付いている。三年間副団長として側にいたジムが知らないはずが無い。

何故そんな事を、そんな怖い顔で聞くのだろう。

「や、そんな、寝込みなんて襲われてませんよ。気配がしたらすぐ起きられます。ご存知でしょう？」

「では、自分から招き入れでもしましたか？それとも一緒に旅をしている輩でもいるんですか？誰と、どこに行くんです、何をしようとしているんです

？」

私の手を拘束しているジムの力が強くなる。

「？ジ、ジム、落ち着いてください」

「ああ、そうですね。冷静じゃ無いです、俺は。この一ヶ月間ずっと狼狽えっぱなしですよ。どうかなりそうです。助けてください、団長……」

こんな状態のジムは初めてだ。いつも余裕そうな微笑みを浮かべていて、冷静で、誰かから助けを求められる側のジムがこんなに狼狽えている。助けを求めている。

まさか私が事前告知無しで騎士団を辞めた事で、何かまずい事が起きているのだろうか。もちろんその可能性は考えていたので、何かあれば電報を届

けてくださいと、イーベル伯爵には新しい街に着く度に現在地の電報を送っていた。けれど、現状そういう電報は宿屋に届いていない。入れ違いになつてしまったのだろうか。

いや、今はそんな事を考えている場合じゃない。

「ジム、突然いなくなつた事に関しては本当に申し訳なく思っています。謝罪はいくらでも致しますので……国で何かあつたのですか？それとも騎士団内部で何か？」

「国？騎士団？違います、全然違う。嫌になるほど正常に回ってますよ、貴女の残した完璧な引き継ぎ書がありましたしね」

私はその言葉にひとまずホッと息を吐く。

「そうですか、良かったです。あ、いえもちろん、他になにか必要な物があれば用意を……」

「……ああ、貴女は本当に何も解っていない。可愛くて、愛しくて——憎らしいくらいです」

「え」

言い訳にしかないが、本来であれば普通の私であればこんな事は無い。こんな、いとも容易く足払いをされて、いとも容易くベッドに押し倒されるなんて事は。

ぎしり、と簡素なベッドが二人分の重さに抗議をあげる。

——今、なに？何を言われた？

可愛くて、愛しいって言われなかった？

憎らしいとも言われたけど。

というか近い、近すぎる。

頭の上に両手を上げさせられて、大きな右手に拘束される。足と足の間にジムの硬い左膝が入り込み、股がぐいっと押し上げられた。

「ひあっ?!♡」

突然、敏感なところを押し上げられて、あられも無い声が出てしまつて顔が熱くなる。顔を隠したいけれど、手を押さえつけられているので動かせない。足をバタつかせようと思つても、ジムの左膝がグイグイ押し上げ続けてくるので、下手に動かしたらまた変な声が……。

「あ……んっ♡」

押し上げられた所為で、下着の折り返しになっている分厚い部分が花芯を擦り上げる。じゅわ♡と蜜が溢れ出したのが分かり、このままではジムに濡れているのがバレてしまうと、頬が熱くなる。

どうしよう、なんでこんな事になっているんだろう。なんでこんな事をするんだろう。

わからないけれど、とにかくジムが怒っている事だけは分かった。

「ジム……ジム、あの、に、憎いのはごもつともだと思います。急にいなくなって、本当に私、申し訳なく思っ……」

「ああ。誤解しないで下さい。貴女が俺に無断で姿を消した事に対して心底

怒っているし、憎らしいとも思っています、本気で憎いだなんて思っていない。可愛さ余ってってやつですね。余り過ぎて困っているんですよ。渡したい相手がいなくなってしまうものですから。本当、参っちゃいますね。人生初めてですよ、こんなに怒ったのは」

にこり、とジムは微笑んだ。黒髪が彼の目元を少し隠す。けれど蜂蜜色がどろりと光るのは隠しきれていなかった。

「か、可愛さ余って……？」

「ええ。そうです」

やはり聞き間違いでは無かった。可愛いって言ってる。

「愛しい愛しい貴女が急にいなくなつて、俺がどれほど絶望したかお分かり

ですか？」

「い、愛しい……？」

誰が？誰を？「貴女」って言ってるけど。

貴女って私？いや、そんな訳がない。

——だって、私はジムの出世をずっと邪魔してきたお荷物団長だ。

ジムは優しいから耐えてきたのだろうけれど、三年間も平民で女で剣しか脳が無いやつの副団長で居続けるのは大変だったはずだ。騎士団にいた時には考えないよう考えないようにと唱えながら、頭の片隅にあり続けた考えは、

四ヶ月前の皇女殿下との婚約の噂が出てきた際に破裂した。

だからこその秘密の退団だったのだ。

でも、それならどうということ？

なんでジムはこんなに怒っているの？王女殿下はどうしたの？

可愛いつてなに？愛しいつてなに？

動揺が、じわりと涙の膜となって瞳を覆い出す。

「あ、あの、ジム、本当に、突然いなくなった事は本当にごめんなさい。だ、だから、あの、まずは起きましよう。落ち着いて、話し合いを……」

大きい右手に捕らわれている両手に痛みが走る。簡素なベッドに押し付ける力がギチリ、と強くなったのだ。

ジムに落ち着いてと言いながら、私自身も全く落ち着いていない。

心臓が痛いほどに鳴っている。呼吸が浅くなってクラクラして来た。

ジムは片手で自身のベルトを外して、私の両手を縛り上げてそのままベツドにくくりつけた。

「ジム!？」

「ええ。しましう。話し合い。たつぷりと」

全く話し合いの体勢ではない。純粹な力で私がジムに勝てる要素は一ミリも無い。

隙を見て逃げ出さなくてはと画策していたら、ジムの左膝が容赦なく私のお股を押し上げてきた。